岡山大学教育実践総合センター紀要，第５巻（2005），pp.109-117

原　著

高等学校における学級集団帰属意識尺度作成の試み

本多　公子（兵庫県立上郡高等学校）井上祥治（岡山大学教育学部）

本研究では、現代の高校生における学級集団への帰属意識の要因を明確にし、その学級集団への帰属意識の要因の構造をもとに、高等学校における学級集団への帰属意識とスクールモラールや、学校生活適応感尺度との関連性について考察した。まず、145名の高校生から学級集団への帰属意識の規定要因についての項目を収集し、高校生の心的リアリティーに添った具体的場面での46の質問項目を選定した。学級集団への帰属意識尺度の得点について因子分析を行ったところ、「学級からの受容」、「学級のまとまり」、「帰属阻害感」の３因子が抽出された。各因子尺度の信頼性分析により、信頼性が確認された。また、全ての並行検査との間に有意な相関がみられることから構成概念妥当性が支持されたと考える。

キーワード：帰属意識、高等学校、学級集団、心的リアリティー

Ⅰ．研究の目的

Leary & Downs (1995)は、所属欲求が人間の最も基本的な欲求であると主張する。それゆえに重要な社会集団から排除される又は、包含されることが心理的に重要（Baumeister & Leary,1995）になってくる。事実数多くの人間行動は社会的繋がりを育成する試みとして、また心理学的に重要な他者に嫌われる可能性を最小限にする試みとして概念化され得る（Baumeister&Leary,1995）。さらにBaumeister & Leary(1995)は、人々は他の人によって妥当とされ、認められ評価されることを好むので、その要求の背後に本質的な人間関係の構成要素が存在し、それは、是認及び親密の要求であることは、疑いもなく、是認は社会的結束を作り、維持するのに欠くことが出来ないとも述べている。

Leary & Downs（1995)は、社会的絆がうまく維持されているかどうかを検知する機能をもったもの（sociometer;ソシオメータ）として自尊感情をとらえている。つまり、自尊感情を維持する行動は、他者から無視されたり、避けられたり、または拒否される可能性を減らすような行動であるから、人々は自身の自尊感情を維持するやり方で振る舞うよう動機付けられていると主張しているのである。このように、自尊感情が社会的な受け入れと密接な関係を持ち、自尊感情維持のための行動が、社会的な排除を避けようとする動機から生ずるのであれば、人々にとって自らが所属する集団との関わりは非常に大きな意味合いを持つと考えられるであろう。Leary & Downs（1995)は、自尊感情脅かしへの反応の大部分は、重要な集団でその人が受け入れられている度合い、または、関係が危機に瀕している度合いという条件下で起こるとしている。

では具体的に、高校生にとって所属の欲求の対象となるべき重要な社会集団とは何か。それは、好むと好まざるとに関わらず日常生活の大部分を占める生活の場であり、自分を取り巻く社会そのものと言っても過言ではない学級集団であろう。小学校入学以来、生徒たちは、主に学級社会における教師や仲間との相互作用を通して、彼らの自尊感情を形成（蘭,1992)していく。

彼らにとって重要な社会集団である学級集団への所属感については、今までに様々な研究がなされてきた（吉森，1982；狩野・田崎，1990)。そして、松山・倉智（1969）は、自己の所属する学校や学級に対する帰属意識を高めて、成員として安定感をもって学校生活に適応しているかどうかが、教育効果に深いかかわりあいをもつ、と述べている。つまり教育効果においては、単なる個人の所属感だけをいうのではなく、その基盤にある、個人がその集団を「自分のもの」として感じ、逆にまた自分自身を「そ

本研究は平成１５年度岡山大学大学院教育学研究科修士論文の一部である

の集団のもの」として感じるといった、個人と集団との間の一体感（田之内，1983）ともいうべき帰属意識にまで深めた研究が必要と考える。また、これまでの研究の多くは、小学校や中学校を対象としたものであり、高等学校における学級集団への帰属意識に関する研究は、あまり見られない。しかし、発達課題の観点においても、青年期にあたる高校生が学級集団に対し求めるものは、学童期のそれとは異なるのではないだろうか。エリクソンのアイデンティティ論によると、青年期には「アイデンティティ対アイデンティティの拡散」が発達課題となる。下山(1998)によれば、アイデンティティとは、「時間的な自己の同一性と連続性の認識」と「他者が自己の同一と連続性を認知していることの認識」という２つの認識が得られることで成立するものであり、その確立は、青年期になされる。また、藤原(1981)は、正常な人格の発達では、重要な他者からの社会的是認を介して、自分が社会から是認、または受容されているといった自尊感情や安定感、有用感、信頼、自信などの形で意識される社会的自己意識を形成してゆくのである。この自己の連続性と不変性こそ同一性（identity）なのである。そして、ここにおける他者としての重要性は、親や教師から同じ年齢の仲間へと移ることから、青年期の心理的葛藤をNewman & Newman(1984)は、「集団同一性 vs.疎外」とよんでいる。よって、そのような時期にある高校生を対象とした学級集団への帰属意識に関する研究が、必要ではないのだろうか。

ところで、学級適応感に関しては、従前よりスクール・モラールという形でとらえられてきた。大西・松山ら(1967)は、スクールモラール・テスト（略称はＳＭＴ、学級適応診断検査ともよぶ）におけるスクールモラールとは、学校の集団生活ないし諸活動に対する帰属度、満足度、依存度などを要因とする児童・生徒の個人的、主観的な心理状態を意味していて、これはまた、学校への適応の程度を示すものとも考えることの出来る概念であると述べている。また、河村（1999)は、中学生のスクール・モラールを規定する要因として、友人関係、学習意欲、教師との関係、学級との関係、進路意識の５つの要因を挙げた。そして、先行研究（高瀬ら，1986)で、指摘された学校への関心、規則への態度、特別活動への態度との関係が特定されなかったとし、その理由として、上記３つの要因が学級集団内の枠を越えた、学校全体やいくつかの学年の交流を含む内容や場面をともなうためと述べている。

さらに、蘭(1992)は、松山ら(1981)の子どもの自己概念と他者関係・学校への態度の関係などについての分析から、肯定的な自己概念および、現実的自己と級友からみられていると認知する他者自己のズレの小ささが学級・学校への適応をもたらしていると述べているが、学級・学校への適応感と帰属意識の関係については、述べられていない。

ところで、高校生を対象とした心理尺度作成の試みとして、内藤ら(1986)の高校生用学校環境適応感尺度作成の試みがある。この尺度は、学校生活適応感尺度の原型である。内藤ら（1986）は、高校生を対象にしたとき、彼らの在籍する高等学校への学校適応感を幅広い範囲で測定することを目標に質問紙作成した。そして、内藤ら（1986）は、学校への適応とスクール・モラールとの関係は、相関的なものであり、互いに影響を与え合うものであるとしている。

よって、スクール・モラールや学校生活適応感尺度に関しては、学級への帰属意識以外のファクターが含まれており、学級への帰属意識のみを問うことになっていないのではと思われる。また、学校生活適応感尺度では肯定的な事項を取り上げる質問のみで「阻害的要因（否定的な事項）がない」ことについて、問われることがなかったかとも思われる。

さて、集団への帰属意識に関する海外での研究は、さまざまな集団を対象として行われてきた。Reichers（1985)は、それらの研究を概観したうえで、再考と再概念化を試みている。Reichers(1985)は、帰属意識は集団の多様な構成員の目的の同一化過程であるとした。そして経営者、労働者、看護師、公務員、教師、学生などさまざまな集団を対象とした調査報告書のレビューをし、それぞれの集団の帰属意識の要因を探っている。

一方、これまでの日本における集団への帰属意識研究は、多くが主に企業の帰属意識についてであった。田之内(1983)は、帰属意識は単なる個人の所属感だけをいうのではなく、その基盤には、個人がその集団を「自分のもの」として感じ、逆にまた自分自身を「その集団のもの」として感じるといった、個人と集団との間に情緒的な一体感の存在がみられるとしている。関本・花田(1987)は、企業帰属意識の構造化と影響要因の研究を行い、「残留意欲」「働く意欲」「価値の内在化」「功利的帰属」の４因子を得ている。しかし、これらは、一般企業の要因であ

り、高校生に応用できるとは限らず、高校生独自の要因もあると考えられる。

帰属意識と密接な関連を持つ学級集団への所属感について先行研究を眺めるならば、古畑(1983)が、どうしたら、学級が子どもの準拠集団となり、所属感を抱けるようになるかが問題とした上で、もっとも基本的には、学級生活が子どもの持っているさまざまな欲求に資するようになっていることが大切とし、特に認知的欲求、自我高揚の欲求、親和の欲求の３つを挙げている。そして、このような欲求がよく充足されるときには、子どもはその学級に所属感を抱くであろうし、逆に、これらの欲求のいずれもが、ないしそのひとつでも全く満たされないならば、子どもはそのような学級に対して、それでもなお所属感を抱くということは考えにくいとしている。しかし、認知的欲求、自我高揚の欲求、親和の欲求を代表とするいくつかの欲求が、みな所属感に等しく関わるのであろうか。先に記したように、Baumeister & Leary(1995)が、人々は他の人によって妥当とされ、認められ評価されることを好むので、その要求の背後に本質的な人間関係の構成要素が存在し得る。そしてそれは、是認及び親密の要求であることは、疑いもなく、是認は社会的結束を作り、維持するのに欠くことが出来ないと述べているところからも、筆者は、欲求同士にいろいろな組み合わせが働いたり、序列があったりするのではないかと推測する。

以上の点から本研究では、高等学校における学級集団への帰属意識を測定する尺度を作成し、高等学校における学級集団への帰属意識の規定要因とその構造を明らかにするとともに、その信頼性と妥当性を検討する。また、高等学校における学級集団への帰属意識の規定要因の構造をもとに、高等学校における学級集団への帰属意識、自尊感情、及び学校生活適応感尺度との関連について分析する。

Ⅱ．研究の方法と結果

［１］予備調査と質問紙の作成

目的：学級集団への帰属意識を高める要因を探求する項目を作成するために、高校生が実際に感じている学級集団に関する肯定的及び否定的な事項を収集し、高等学校の学級集団においての帰属意識を測定しうる質問紙を作成する事を目的とする。

【予備調査】

１）調査時期

２００２年１１月

２）調査対象

兵庫県内公立高校第一学年　普通科生徒（男・女計１４５名）

３）調査方法

調査者が直接、対象者に調査を依頼し、「学級集団における望ましさ」に関する事例を自由に記してもらった。質問紙はその場で全員から回収した

４）調査項目

中学校時代以降の学級経験から「この学級が好きだなー又は、いやだなーと思った時」について想起し、具体的に記してもらった。

５）調査結果

対象者の回答から学級集団に関する肯定的感情として、３０２個の事例を得た。また否定的感情としては、２６３個の事例を得た。これらの事例は、現職高校教諭４名によって整理が行われた。ＫＪ法の整理の結果、学級集団に関する肯定的感情及び否定的感情として、おのおの１３のカテゴリー、計２６のカテゴリーを得た。そして、各カテゴリーより代表的項目２～３項目を採用し、６２項目からなる「学級集団における望ましさの程度」質問紙を作成した。

【 第一回質問紙調査】

１）調査時期

２００３年２月

２）調査対象

兵庫県内公立高校第一学年　普通科・専門科生徒（男・女 計２４１名）

３）調査方法

調査者が直接、対象者に調査を依頼し、各測定項目に答えた上で、対象者自ら封筒に入れてもらった。その場で全員から回収した。

４）調査項目

質問紙は以下の項目から構成されている。なお、集計に際しては、否定的な質問項目でのスケールを反転させた。

Ａ，学級集団に関する肯定的及び否定的各項目に対する望ましさの程度

予備調査をもとに６２項目を作成した。そして、各項目について、⑦「とても強く思う」から①「全く思わない」までの７件法で回答を求めた。（２クラス、６７人に実施）

Ｂ，　現在の学級集団への帰属意識について

予備調査をもとに作成した６２項目に１項目追加して作成した。そして、各項目について、⑦「とて

も強く思う」から①「全く思わない」までの７件法で回答を求めた。（５クラス　１７３人に実施）

C，　学級適応診断テスト（ＳＭＴ）級友との関係項目

中学・高校用から１５項目を使用した。そして、各項目について、⑦「とても強く思う」から①「全く思わない」までの７件法で回答を求めた。（５クラス、１７３人に実施）

D，　学校生活適応感に関する項目

高瀬ほか（1986）による学校生活適応感尺度から３６項目を使用した。そして、各項目について、⑦「とても強く思う」から①「全く思わない」までの７件法で回答を求めた。（５クラス、１７３人に実施）

５）調査結果

A，　２クラス　６７人に対し実施した「学級集団における望ましさの程度」における各項目が、果たして確かに望ましい（促進的）要因、望ましくない（阻害的）要因なのかを検討した。調査対象の７０％以上が、望ましい、もしくは望ましくないと回答する事を基準として判定したところ、６２項目中２０項目が７０％を下回った。この２０項目に対しては、弁別力なし、と考えられる。

B，　「学級集団における望ましさの程度」６２項目に「私は、このクラスの一員でよかった」との項目を加えた６３項目の「帰属意識尺度（６３項目）」の質問紙を作成、５クラス　１７３人に実施。集計においては、否定感情項目でのスケールを反転させた。この尺度に対するクロンバックのα係数は.914となった。また、合計点が現実的な学級集団への帰属意識を表わすと考え、合計点と「私は、このクラスの一員でよかった」という質問項目の得点との相関を調べたところ、両者の間に.769の相関が見られた。　更に「帰属意識尺度（６３項目）」と学級適応感尺度の中の所属感要因との関係は.862であり、学校生活適応感尺度の合計得点（.361）及び「友人関係」（.685）「特別活動への態度」（.305）との間に正の相関が見られた。そこで、「学級集団における望ましさの程度」において、弁別力なしと考えられた２０項目のうち、教師に関する項目については、経験上の判断から残し、他の１７項目を排除し、「帰属意識尺度（４６項目）」（Table1）を作成した。

［２］本研究

目的：　「高等学校における学級集団帰属意識」の構造を明らかにするとともに、その信頼性と妥当性を検討する。　さらに、「高等学校における学級集団帰属意識」、自尊感情、及び学校生活適応感尺度との関連について分析することをも目的とする。

Table 1　「帰属意識尺度（46項目）」項目内容

01	文化祭や体育祭で優秀賞のとれるクラスである
02	体育祭で、難しいクラス演技を成功させることができる
03	学校行事の時には、クラス全員が協力して一生懸命にする
05	学校行事の時でも協力的でない人がいて、クラスがまとまらない
06	居心地がよくて、落ち着くことができる。
07	クラスの雰囲気が暗い
11	クラスの皆が仲が良い
12	クラスの皆が楽しそうだと自分も楽しい
13	クラスの雰囲気がとても良く、皆で笑いあえる
14	クラスの皆が明るく面白い
15	登校したら、教室にいる皆が「おはよう」と言ってくれる
17	クラスが静かすぎて、楽しくない
18	クラスの皆は、私の失敗を責めたりしない
19	私の失敗をフォローしてくれるクラスメートがいる
20	学校を休んだ時に、心配してくれるクラスメートがいる
22	クラスメートが私の特技や努力を認めてくれている
23	小さなことでもクラスメートに頼りにされる
24	クラスの中でケンカが絶えない
25	私の嫌いな人がクラスにいる
26	クラスメートと気が合わない
27	クラスの雰囲気になじめていない
28	自分勝手な人や、自己中心的な人がいる
29	いじめられている子がいるのに周りが見て見ぬ振りをしている
31	気をつかっていて、クラスの中では心から笑えない
32	クラスの中の仲良しグループと気まずくなった
34	真剣に授業を受けたいのに邪魔される
36	もう一度、このクラスになりたいと思う
37	担任の先生に、勉強以外の話しや相談ができる
38	授業中でも楽しいなと思う
39	クラスの中で気の合う友達がたくさんできた
40	クラス委員などを無理やりやらされる
41	私の失敗を笑う
42	私の頑張りは、皆に評価してもらえていない
43	クラスの中で私は、何をやっても上手くいかない
45	私の意見を受けいれてもらえない
46	行事の準備や練習の場に入りにくい
49	もし、「友達と　○人のグループを作れ」と指示されたら、組む相手がいなくて私は余ってしまう
53	私は、仲間はずれになっている
54	陰口を言われたり、嫌なうわさを流されたりする
55	クラスメートは、わたしの名前を覚えてくれていない
56	先生方から、このクラスばかり怒られる
57	担任の先生は、勉強について厳しく指導する
58	担任の先生は、規則に厳しい人である
60	担任の先生が、好きである
61	先生をいじめることがある
63	私は、このクラスの一員でよかった

項目番号は、『学級集団における望ましさの程度』における番号である

【 第二回質問紙調査】

１）調査時期

2003年７月及び10月

２）調査対象

７月の調査は、兵庫県内公立高等学校第二学年普通科及び専門科生徒（男・女 計250名）

10月の調査は、兵庫県内公立高等学校第一学年普通科及び専門科生徒（男・女 計217名）

３）調査方法

７月の調査では、調査者が直接、対象者に調査を依頼。１０月の調査では、各クラス担任教師より対象者に調査を依頼。各測定項目に答えた後、対象者自ら封筒に入れてもらい、その場で回収した。

４）調査項目

質問紙は以下の項目から構成されており、集計に際しては、否定的な質問項目でのスケールを反転させた。

A，　自尊感情の項目

Rosenberg,M.（1965）による自尊感情尺度 １０項目を利用した。そして、各項目について、⑦「とても強く思う」から①「全く思わない」までの７件法で回答を求めた。

B， 現在の学級集団への帰属意識についての項目

第一回質問紙調査をもとに作成した「帰属意識尺度（４６項目）」を利用した。そして、各項目について、⑦「とても強く思う」から ①「全く思わない」までの７件法で回答を求めた。

C， 級友との関係及び教師への態度項目

学級適応診断テスト（ＳＭＴ）中学・高校用から級友との関係項目及び教師への態度項目各１５項目ずつ３０項目を利用した。そして、各項目について、⑦「とても強く思う」から①「全く思わない」までの７件法で回答を求めた。

D， 学校生活適応感に関する項目

高瀬ほか（1986）による学校生活適応感尺度の各因子より３項目ずつ計１８項目を利用した。そして、各項目について、⑦「とても強く思う」から①「全く思わない」までの７件法で回答を求めた。

５）調査結果

「帰属意識尺度（46 項目）」について、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行ったところ、Table 2 に示す結果を得た。

項目分析により２１項目が排除され、残り 25 項目に対するクロンバックのα係数は.888 であることから、ある程度の内的一貫性が得られ、信頼性を認めうると考えられる。また、この尺度の合計点は、学級集団への帰属意識を表すと考えた。そこで、学級に対する全体的な満足感を問う総括的な質問項目 46「私は、このクラスの一員でよかった」の項目得点と上記２５項目の「高等学校における学級集団帰属意識尺度」の合計点との相関を調べたところ、両者の間には.752 の相関が見られた。さらに、A,「自尊感情の項目」C,「級友との関係及び教師への態度項目」およびD「学校生活適応感に関する項目」の検査との間に有意な高い相関（Table 3）がみられることから、一応の因子的妥当性が支持されたと考えられる。

また、「高等学校における学級集団帰属意識」と心理的適応の相関を細かくみるために、「高等学校における学級集団帰属意識尺度（２５項目）」と自尊感情及び学校生活適応感尺度各因子との相関（Table4,5）の結果も示す。

Table2 帰属意識尺度項目の因子分析の結果

（主因子法、**Promax** 回転後の因子パターン）

質問項目	第1因子	第2因子	第3因子
第1因子（α＝.840）「学級からの受容感」			
#35 クラスの雰囲気になじめていない	.767	-.061	.039
#11 私は、仲間はずれになっている	.730	-.152	.106
13 クラスの中で気の合う友達がたくさんいる	.706	.096	-.040
#45 もし、「友達と 0人のグループを作れ」と指示されたら、組む相手がいなくて私は、困っていそう	.633	-.115	.064
#43 孤立かっていて、クラスの中ではひとりぼっち感がある	.544	-.037	.220
#38 クラスの中で私は、何をやってもよそよそしいかんじ	.544	-.220	.184
#4 クラスメートと気が合わない	.523	.090	.159
#31 行事の準備や実習の際に参加したくない	.468	-.032	.294
#33 クラスメートは、わたしの長所を認めてくれない	.460	-.012	.011
23 金銭したら協力にいるクラスメートが あいさつをしてくれる	.371	.090	-.019
第2因子（α＝.882）「学級のまとまり」			
1 大きな学校行事で良い結果が出せるクラスである	-.181	.762	.158
8 学級行事の時には、クラス全員が協力して一生懸命にする	-.039	.647	.024
33 もう一度、このクラスになりたいと思う	.234	.544	.050
18 学習面で、クラスメートの共同を積極的に応援したい	.188	.519	-.121
36 勉強の先生が、好きである	-.059	.518	-.066
6 勉強の先生に、質問以外の話しや相談ができる	-.064	.517	-.072
2 話し合いがよくて、困ると聞くことができる。	.209	.464	.183
30 クラスの雰囲気が良い	.268	.376	.233
第3因子（α＝.849）「学級阻害感」			
37 自分勝手な人や、自己中心的な人がいる	-.251	.134	.515
#44 私の嫌いな人がクラスにいる	-.183	.043	.579
#17 異性に嫌われたいのに無視される	-.132	.041	.534
#42 いじめられている子がいるのに、周りが見て見ぬふりをしている	.060	-.040	.437
#22 私の発言は、クラスメートに評価してもらえない	.202	-.166	.463
#21 クラスの中でケンカが絶えない	.042	-.037	.417
#19 クラスメートは、わたしの失敗を笑う	-.117	-.128	.412
説明率	33.4	9.8	4.1

項目欄の番号は、質問紙での配列順序を示す　#は反転項目
項目分析により3項目が削除された

因子相関行列

因子	1	2	3
1	1.000	.526	.597
2	.526	1.000	.488
3	.597	.488	1.000

因子抽出法：最尤法
回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

Table 3「高等学校における学級集団帰属意識尺度」、自尊感情、学級適応診断テスト（級友との関係項目）、学校生活適応感尺度の合計得点の相関関係

		自尊感情	級友	適応感
帰属	Pearsonの相関係数	.274	.706	.317
	有意確率(両側)	.000	.000	.000
	N	403	397	398

Table 4 「高等学校における学級集団帰属意識」の各因子項目ごとの自尊感情との相関

相関係数		自尊感情
受け入れ	Pearsonの相関係数	.357
	有意確率(両側)	.000
	N	417
まとまり	Pearsonの相関係数	.164
	有意確率(両側)	.001
	N	421
帰属阻害	Pearsonの相関係数	.117
	有意確率(両側)	.017
	N	418

Table 5 「高等学校における学級集団帰属意識」と学校生活適応感尺度の各因子項目ごとの得点との相関

相関係数		意欲	友人	教師	規則	進路	特活
学級からの受容感	Pearsonの相関係数	.078	.527	.127	-.150	.111	.464
	有意確率(両側)	.114	.000	.009	.002	.023	.000
	N	416	416	416	416	416	416
学級のまとまり	Pearsonの相関係数	.096	.303	.394	.027	.137	.593
	有意確率(両側)	.048	.000	.000	.583	.005	.000
	N	421	421	421	421	421	421
帰属阻害感	Pearsonの相関係数	-.140	.100	.042	-.215	-.028	.165
	有意確率(両側)	.004	.040	.386	.000	.568	.001
	N	418	418	418	418	418	418

Ⅲ．考察

本研究では、個々の高校生の心理的背景を理解するための、共通の基軸となり得る観点として、高等学校における学級集団への帰属意識尺度とその分析及び、帰属意識と心理的適応との関連についての研究をおこなった。

まず尺度の作成にあたっては、高校生の心的リアリティーに近づけることを重視した。たとえば、自由記述で行った予備調査の中から、高校生が記載した文言を出来得るだけそのまま用いた。「学校を休んだ時に、心配してくれるクラスメートがいる」、「登校したら教室にいる皆が挨拶をしてくれる」などは、従来の学校や学生を対象とした尺度の中にはみられない、具体的場面での自然な表現である。中には、「私と同じキャラクターのクラスメートがいる」など、あまりに突出した表現のものもみられたが、それらは、分析の過程で淘汰されていった。その結果得られたものが、26 項目の「高等学校における学級集団帰属意識尺度」である。そして、「高等学校における学級集団帰属意識尺度」の合計得点は、自尊感情、学級診断テスト（級友との関係項目）、学校生活適応感尺度の合計得点との間にそれぞれ有意な正の相関関係が見いだされた(Table3)。

さらに、因子分析の結果、「高等学校における学級集団帰属意識」は、「学級からの受容感」、「学級のまとまり」、「帰属阻害感」の３因子構造となっていることが示唆された。

Table2 にみられるように、第１因子「学級からの受容感」は、項目 11、項目 45、項目 24 に表されているような「仲間はずれになっていないかどうか」であったり、項目 32,項目 23 のように「自分の存在が認知されているか」や、項目 35,項目 15,項目 06 に表れているように「浮き上がった存在ではないのか」といった具体的内容の項目となっている。自分は、受け入れられているのか、拒絶されていないのか、自らに対する判断を級友の具体的行動や事実からとらえていることがうかがえる。特に項目 23「登校したら教室にいるクラスメートが挨拶をしてくれる」は、杉田峰康（1985)が、日常の挨拶などを互いの存在を承認することであり、人間関係を維持していくための最低限のストローク（一人の人が他の人に与える刺激）と位置づけ、その対象は、大きな仲間集団であるとしていることとの一致をみる。

また、第１因子「学級からの受容感」には、反転項目が多く含まれる。既存の学校生活適応感尺度では肯定的な側面から問われることが多く、「阻害的要因（否定的な側面）がない」ことについて、問われることがなかった。しかし、「阻害的要因がない」かどうかの検討、つまり否定的事項の有無は、仲間からの受容が最も重要となる青年期の発達課題上の観点からも重要である。思春期現象について、文部省（1974）は、集団への所属欲求が強くなり、自己を受け入れてくれる仲間を求めており、仲間から排訴されたり、孤立化することに大きな不安を抱くとしている。また、集団における受け入れられ感の重要性は、自尊感情の研究においても重要視される点であり、Leary & Downs（1995）が自尊感情システムは、包含よりもむしろ排除を避けるのに働く、としたことと一致する点に関しても、すでに何度か検討している通りである。以上のことから、自らが、学級集団から拒絶されていないか、どうかを検討する具体的項目が、より高校生の心的リアリティーに即したものとなっていると推察される。

第２因子「学級のまとまり」は、項目 08「学校行事の時には、クラス全員が協力して一生懸命にする」、項目 18「体育祭でクラスメートの演技を一生懸命応援したい」のように学級集団の一体感の有無についてや、項目 01「文化祭や体育祭で良い結果が出せるクラスである」、項目 02「居心地がよくて、落ち着くことが出来る」に表れている雰囲気やイメージといったもの、項目 33「もう一度このクラスになりたい」、項目 20「担任の先生が好きである」などの主観といった要素で構成されている。つまり、第１因子「学級からの受容感」が、個別具体的行動要因から成り立っているのに対し、第２因子「学級のまとまり」は抽象的要因から成り立っているといえよう。言い換えるならば、第２因子「学級のまとまり」は、第１因子「学級からの受容感」よりも、高次な抽象的要素を含むと考えられることから、第２因子は第１因子より上位の概念であると推測できるのである。

一方、第３因子には、文字どおり学級集団への帰属意識を「阻害する要因」が具体的条件として並んだ。項目 17 や、項目 21 などである。現実的に状況を認識するレベルとして、‘自分にとって好ましい状況’がある前に、‘自分にとって好ましくない状況がない’という段階が存在する。つまりまずは、「阻害する要因・条件」の有無を問うことが重要であると考える。このように、具体的、客観的要因から成り立っている第３因子は、下位概念であると言えよう。

ここで、３因子の関係をもう一度整理するために、

Baumeister&Leary(1995)の考察を援用したい。Baumeister&Leary(1995)は、人間関係の構成要素について次のように述べている。人々は他の人によって妥当とされ、認められ評価されることを好むので、その要求の背後に本質的な人間関係の構成要素が存在し得る。そしてそれは、是認及び親密の要求であることは、疑いもなく、是認は社会的結束を作り、維持するのに欠くことが出来ない。つまり、Baumeister&Leary(1995)は、人間関係の構成要素として、是認と親密、社会的結束の３つの要因が考えられるが、それらは並列に存在するのではなく、是認と社会的結束とは上位下位の関係であるとしている。是認という、具体的な下位の欲求がある程度、満たされることが、社会的結束という抽象的要因を作り、維持するのだという。この概念図を「高等学校における学級集団帰属意識」の３因子の関係に当てはめるならば、是認と社会的結束のような直の上下関係は、ともに肯定的感情（否定的感情がない）ことにおいて、その根本は同一であると考えられる第１因子「学級からの受容感」と第２因子「学級のまとまり」であろう。そして、第１因子「学級からの受容感」、そして同じく具体的、客観的要因から成り立っている第３因子「帰属阻害感」という２つの下位概念がある程度満たされることにより、上位概念の第２因子「学級のまとまり」が反応し始めると言えよう。よって、第２因子「学級のまとまり」の項目得点の高低には、クラスとして構成されてからの時間の長さが関係するのではないかとも推察できる。

更に、スキマー理論によるならば、人は、人や事物についてのよく組織化された知識構造を必要とし、情報に選択的に接するという（村田,1982)。その際の知識とは、ここの具体的体験そのものよりも、むしろ、それらの事例を一般化し、抽象化したものと言える（岡林,1995)。佐伯(1982)は、その知識構造は階層的でネットワーク的な構造を持っていて、その代表的なものに上位／下位の関係があるとし、具体的な下位の知識を上位の知識が包摂するという。つまり、「高等学校における学級集団帰属意識」の構造を考えるならば、まず第１因子の「学級からの受容感」が第２因子の「学級のまとまり」に包摂され、さらに次の階層にて第３因子「帰属阻害感」が包摂されていくとも考えられなくもない。

ところで、この「高等学校における学級集団帰属意識」の特徴としては、第２因子「学級のまとまり」が、担任の教師を含めたクラスの一体感の有無についての内容を示していることも挙げられよう。言い換えるならば、高校生にとって学級集団への帰属意識という観点では、先生への態度という単独因子を持たず、「学級のまとまり」という概念の中に含まれてしまっていると考えられるのである。青年期という発達段階にあって、高校生たちは、教師を同一視の対象とするのではなく、自分たちと一体になれる人物かどうかを量り、それにより学級集団への帰属意識を上下させている面もあることが考えられる。

以上のことから、「高等学校における学級集団帰属意識」の構造は、「学級からの受容感」、「学級のまとまり」、「帰属阻害感」という３因子が、それぞれ並列に存在するのではなく、上位概念の「学級のまとまり」と下位概念の「学級からの受容感」、「帰属阻害感」という構造になっていると思われる。

また「高等学校における学級集団帰属意識」の３因子と自尊感情、学級診断テスト（級友との関係項目)、学校生活適応感尺度との関連性について検証し、以下のようなことが示唆されるに至った。

１）第１因子「学級からの受容感」には、自尊感情との関連が色濃く示された。社会的受け入れ（受容）と密接に結び付いている(Leary & Downs, 1995)自尊感情との高い相関($r=.357, p<.001$）から、第１因子による「学級からの受容感」の測定が妥当であると考えられる。 よって担任教諭は、「学級からの受容感」の因子得点が低い生徒に対し、学級運営の中で、学級集団全体やクラスメートからその生徒に対し、「学級からの受容感」の項目内容に沿った刺激が受けられるよう手だてを講ずることで、「学級からの受容感」の向上を図ることができると考えられる。

２）学校生活適応感尺度と「学級のまとまり」の関連については、「学習意欲」「友人関係」「教師」「特別活動への態度」の４因子との間に関連性が示されたように思われる(Table5)。 内藤(1987)らは、「学習意欲」「友人関係」「教師」「特別活動への態度」の各領域には、個人の心理的な内的適応感も反映されるとしているところから、「高等学校における学級集団帰属意識尺度」においても「学級のまとまり」因子に生徒の心理的適応感が反映されると考えられる。

２）第３因子では、「帰属阻害感」有無に関わる具体的な項目が示された。このことにより、担任教諭が日々の学級運営の中で、直接的に「帰属阻害感」の有無を変化させことが出来る可能性が示されたように考える。例えば「真剣に授業が受けられる環境を

保証する」「一人一人のがんばりが、学級の他の生徒によって評価される場面を作る」等の学級運営・授業構成が高校生の学級帰属意識の向上においても重要であると考えられる。ただし、「帰属阻害感」は、学校生活適応感尺度の「学習意欲」「規則への態度」「進路意識」などの各因子とに負の関係がみられた。このことは、他者としての重要性が、親や教師から仲間へと移る青年期の発達課題と関連していると考えられるが、今後詳細な検討を要するものと思われる。

以上、本研究では、高等学校における学級集団への帰属意識を規定する要因を示唆すると共に、高等学校における学級集団への帰属意識と心理的適応の関係の一端を明らかにする事ができたと考える。

引用文献

蘭千壽　1992　セルフエスティームの形成と学校の影響 178-199. 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽（編集）セルフエスティームの心理学. ナカニシヤ出版,

Baumeister,R. F. ・Leary, M. R. 1995 The Need to Belog:Desire for Interpersonal Attachments as a Fundamental Human Motivation . *Psychological Bulletin* , Vol.117 , No.3 , 497-529.

Leary, M. R. & Downs,D. L. 1995 Interpersonal Functions of the Self-Esteem Motive : The self-Esteem System as a sociometer. In M. H. Kernis. (Ed.), *Efficacy, Agency, and Self-Esteem* (pp. 123-144). Plenum press, New York,

藤原正博　1981　自我同一性と自尊感情の関係 85-89. 遠藤辰雄（編集）アイデンティティーの心理学. ナカニシヤ出版

古畑和孝　1983　よりよい学級をめざして. 学芸図書

狩野素朗・田崎敏昭　1990　学級集団理解の社会心理学. ナカニシヤ出版

河村茂雄　1999　生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発(2)、スクール・モラール尺度(中学生用)の作成. カウンセリング研究, Vol.32, No.3, 39-47.

松山安雄・倉智佐一　1969　学級におけるスクール・モラールに関する研究. 大阪教育大学紀要, 第 18 巻, 第Ⅳ部門, 19-35. 39-47.

松山安雄・秋葉英則・北村絹江　1981　児童の自己概念と学校に対する態度について. 大阪教育大学紀要（第Ⅳ部門）, 30, 115-126

内藤勇次・浅川潔司・高瀬克義・古川雅文・小泉冷三　1986 高校生用学校環境適応感尺度作成の試み. 兵庫教育大学研究紀要, 7, 135-145

Newman, B.M. ・.Newman, P.R. 1984 *Development Through life* : Third Edition. A Psychosocial Approach. 福富護（訳）1988　新版生涯発達心理学　エリクソンによる人間の一生とその可能性. 川島書店

大西佐一・松山安雄編　1967　ＳＭＴ、学校適応診断検査手引き. 日本文化科学社

Reichers, A. E. 1985 A Review and Reconceptualization of Organizational Commitment. *A cademy of Management Review,* Vol.10, No.3, 465-476.

関本昌秀・花田光世　1987　企業帰属意識の構造化と、環境要因の研究. 産業・組織心理学研究, Vol.1, No.1, 9-20.

下山晴彦　1998 青年期の発達. 183-205. 下山晴彦（編集）教育心理学Ⅱ　発達と臨床　援助の心理学. 東京大学出版会

高瀬克義　1986　学校生活適応感尺度. 577-581. 堀洋道・山本真理子・松井豊（編集）心理尺度ファイル　人間と社会を測る. 垣内出版

田之内厚三　1983　帰属意識と同一化メカニズムに関する基本的枠組みの検討. 日本大学心理学研究, 5 号, 14-24.

吉森護　1982　教師からみた学級・子どもからみた学級. 58-101. 浜田陽太郎（編集）子どもの社会心理学. 金子書房

Title : An experiment on making "Belongingness to Classroom Group Scale" in high school.

Kimiko Honda (Hyogo Prefectural Kamigoori High School)
Shoji Inoue (Faculty of Education, Okayama University)

Abstract: In this study, factors of "Belongingness to Classroom Group" among high school students of today were clarified and the correlations with "School Morale" and "Adaptation to School Life Scale" were also investigated under the structure of those factors. To begin with, items of factors of "Belongingness to Classroom Group" were collected from 145 students and 46 questionnaires were selected from concrete situations meeting their mental reality. After that, factor analysis was done on the scores and three factors - "Acceptance from Class", "Class Unity" and "Obstacle to Belonging" - were extracted. By doing the reliability analysis, it is understood that sufficient reliabilities have been confirmed on these three factors. Also, significant correlations were observed with all tests done in parallel and therefore we think that the construct validity has been supported.

Keywords: Belongingness, High School, Classroom Group, Mental Reality.